

東日本視察交流記（8）

6月13日（月）（その1）昭和61年大水害を乗り越えて

朝、9時過ぎに佐々木さんがホテル到着。今日は、昨日と反対に東に向かう。

午前中にマルセンファーム、お昼にダイアファーム、午後に東松島市の被災地2区、夕方におっとちグリーンファームを訪問するという日程である。

まず大崎市松山の酒造会社「一の蔵」に立ち寄り、構内を見た。被害の跡は外からはもう見えないが、HPによれば大きな被害があり、全力をあげて復旧に努め38日後に操業を再開したという。この会社は、環境保全米Bタイプの米を使用して



いる。「環境Bタイプは本田で化学肥料及び殺虫剤の使用が認められておらず、化学農薬は除草剤のみの使用が可能。その際に使用できる成分回数が5成分以下」（HP）という。そのほか、リターナブル瓶使用などさまざまなエコ活動を行っている。

前号で書き忘れたが、成澤さんのところでも被害があり、関東や名古屋からのボランティア13人が来てくれて、育苗箱5000個を整理してくれた。「精神的バックアップになった。恩返しをしたい」と成澤さんは言っていた。



大崎市鹿島台が近づいてくると、水田の中にハウスの一群が見えてきた。マルセンファームである。若い社長の千田卓也さんが出迎えてくれた。お父さんが会長、弟さんが専務である。

ハウスでは、デリシャストマトとほうれん草を輪作している。また菊の周年生産をし、水田は作業受託を中心に行っている。

「トマトの連作障害はでないのですか」と聞くと、「いまがトマトの最後の時期で、そのあと薬剤を使わない2週間ほどの作業で消毒し、ほうれん草を植えます。ほうれん草もその作業をうまくサポートしてくれます。ですから連作障害はおきません」と。

水田をみると、カモメがたくさん飛んで来て餌をついばんでいる。京都鴨川でみるカモメと同じ顔をしていた。ユリカモメなのだろう。

ハウスはビニールハウスも多いが、ガラスハウスも多い。費用はかかる。





写真左のトマト栽培ハウスは、平成 16 年度の「新世代アグリビジネス育成事業」によるものであると看板が出ていた。

ここまで来るには一つの大きな転機があった。昭和 61 年の鳴瀬川の大洪水である。「もうだめだと思った」と会長さん。しかし、ほんの一部水害をまぬかれた畑があっ

て、その野菜を出荷したらけっこう値段がついた。全域的に洪水にやられていたの
で、市場価格が高かったのである。そのほんの一部が希望の火となり再生に踏み出
すことができたのだ、と。

私は、今回の東日本震災の被災農家にとって、希望につながる「ほんの一部」が
いま大切なのだとあらためて思った。

社長に「被災農家の若い人をここで引き受けることはできますか」と尋ねた。「近
在の方たちにここで働いてもらっているのでその余裕はないが、なにか復興にかか
わる研修事業のようなものが行われれば引き受けることはできる」との答えがあっ
た。

収穫されたトマトをいただき、トマトジュース缶をお土産にもらった。味は甘く
さわやかでトマト独特の深さがあった。

(13 日、続く)